



CQM(超短期経済予測モデル)

稲田義久(APIR 研究統括)

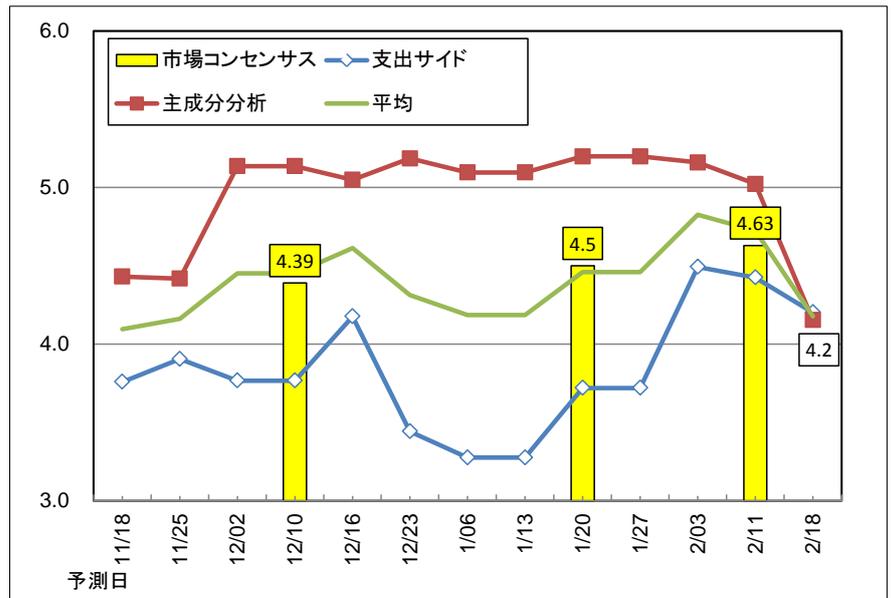
内容に関するお問い合わせは下記まで
e-mail:inada-y@apir.or.jp

日本経済(週次)予測(2014年2月18日)

ポイント

- ▶GDP1次速報値によれば、10-12月期の実質 GDP 成長率は前期比年率+1.0%となった。4期連続のプラス成長を記録したが、伸びは年前半から減速し前期並みにとどまった。
- ▶実績(+1.0%)は市場コンセンサスや超短期予測からはかなり下振れた。
- ▶10-12月期成長率の中身を見ると、内需は堅調で5期連続の増加(同+3.2%ポイント)となったが、純輸出は同-2.2%ポイントと2期連続のマイナスとなった。
- ▶円安にもかかわらず、輸出の伸び悩み、輸入の加速は、2014年経済を予測するうえで、民間消費には期待できないので、不安材料といえよう。
- ▶今週の支出サイドモデルは、1-3月期の実質 GDP 成長率を前期比年率+4.2%と予測する。内需は駆込み需要の影響もあり引き続き堅調で、一方、純輸出の寄与度がプラスに転じるためである。

CQM 予測の動態：実質 GDP 成長率
2014年1-3月期(%, 前期比年率換算)



<1-3月期は駆込み需要を主因として成長率は加速>

2月17日発表のGDP1次速報値によれば、10-12月期の実質GDP成長率は前期比年率+1.0%(前期比+0.3%)となった。4期連続のプラス成長を記録したが、伸びは年前半(1-3月期前期比年率+4.8%、4-6月期同+3.9%)から減速し、7-9月期(+1.1%)並みにとどまった。また市場コンセンサス(ESPフォーキャスト2月調査：同+3.06%)や超短期予測(同+3.6%)からかなり下振れた。

10-12月期の実質GDP成長率の中身を見ると、内需は堅調で5期連続の増加(前期比年率+3.2%ポイント)となったが、純輸出は同-2.2%ポイントと2期連続のマイナスとなった。2013年間で見れば、各四半期とも内需は3%を超える堅調な伸びとなったが、純輸出は前半こそ強かったが後半はマイナスに転じている。円安にもかかわらず、輸出の伸び悩み、輸入の加速は2014年経済を予測するうえで不安材料といえよう。

今週の予測では、1月の国内企業物価指数、12月の鉱工業生産指数(確報値)、第3次産業活動指数、民間機械受注及び建設総合統計が更新された。また10-12月期のGDP1次速報値が追加された。

これらのデータを更新した、今週の支出サイドモデルは、1-3月期の実質GDP成長率を前期比+1.0%、同年率+4.2%と予測する。内需は駆込み需要の影響もあり引き続き堅調で(前期比+0.8%)、一方、純輸出の寄与度がプラスに転じるためである(前期比+0.3%)。実質GDP成長率の予測値は先週(+4.4%)から幾分下方修正された。2013年度の成長率は前年比+2.2%となろう。

・本レポートは執筆者が情報提供を目的として作成したものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
 ・当研究所は、本レポートの正確性、完全性を保証するものではありません。また、本レポートの無断転載を禁じます。
 ・お問い合わせ先：一般財団法人アジア太平洋研究所 contact@apir.or.jp 06-6485-7690